

日本文学研究資料叢書

平安朝物語

I

有 精 堂

日本文学研究資料叢書

平安朝物語

I

|| 竹取物語・伊勢物語 ||

日本文学研究資料刊行会編
有精堂

日本文学研究資料叢書

平安朝物語 I

定価 1500 円

昭和 45 年 11 月 20 日 発 行

編 者 日本文学研究資料刊行会

発行者 有精堂出版株式会社

代表者 山 崎 誠

東京都千代田区神田神保町1-39

発行所 有精堂出版株式会社

電話 03(291)1521~3 番

郵便番号 101

山之内印刷

3393-550617-8610

目次

竹取物語

竹取物語の再検討	橘 純一	一
竹取物語私考	岡 一男	三
竹取物語私見 — 三室戸齋部秋田を中心にして —	荒井 義雄	四
竹取物語の文学史的位罫	西郷 信綱	五
竹取物語の成立年代並に作者に就いて	武田 宗俊	五
竹取物語の成立年代について	奥津 春雄	七
竹取物語における和歌の質 — 作者・成立時期に関する試論 —	中川 浩文	八
竹取物語の方法と成立時期 — 八火風の姿あるいはアレゴリー —	三谷 邦明	四
竹取物語の諸本	中田 剛直	一六
竹取翁考	柳 田 国男	二〇
新資料より観たる竹取物語	三谷 栄一	二六
竹取物語の女主人公	塚 原 鉄雄	二六
竹取物語における「文体」の問題	阪倉 篤義	二四

伊勢物語

伊勢物語研究 — 伊勢物語とその作者 — 窪田 空穂 : 一五

伊勢物語散佚諸本管見 関 良 一 : 一七

伊勢物語の成長に関する覚え書 片桐 洋 一 : 一九

— 図書寮本異本業平集をめぐる —

伊勢物語の三元的成立の論 辛 嶋 稔 子 : 三二

伊勢物語の原本について 大 津 有 一 : 三五

伊勢物語流布本の源流とその性格 山 田 清 市 : 三三

伊勢物語の民謡性 福 田 良 輔 : 三六

— 万葉集・古今集・神楽歌・催馬楽を中心として —

*

解 説 三 谷 邦 明 : 三九

竹取物語・伊勢物語研究参考文献 二六

竹取物語の再検討

第一 国語学的検討

一、本物語の句の長さについて

竹取物語の著作年代については、昌泰延喜を隔つる事遠からぬ時代の著であらうといふ位の、漠然たる推定が与へられてゐるに止まる現状である（国文学全史（一九五九参照））。今少しこれを確實にして見たいといふ希望から、竹取物語の文章和歌について、二三の国語学的検討を試みて見たい。先づ句の長さの測定から始める。但し句の長短といふ事、其の他総べて斯の如き目的の調査は、他の作物との比較を必要とする事勿論であるから、此の項では、竹取と略同時代であらうとせられてゐる伊勢物語との比較を主とし、参考としては、他の平安朝作物とも比較する事にする。

此の調査は下の方法によつた。竹取及び之に比較さるべき物語につき、発端部のやうな解説的準備の部分と、作家の興味の高まつて来た中心部との二部を区分し、其の各部に就き、百句を数へる。句とはセンテンスの義であるが、詞の内のセンテンスも、地の文に於けると同価値に数へる事とする。尚挿入の和歌も一句に数へる。さ

橘 純 一

うして其の百句を有朋堂文庫の本について、正味行数に換算し、百句の行数で比較する。但し一行の文字数は三十九字を標準とする。つまり比較される各が、皆百句の行数であるから、其の数値が略相互の句長の比率を示すわけである。

先づ竹取・伊勢のを竝べ挙げる。甲部とあるのは発端部、若しくは之に相当する部、乙部とあるのは、中心部、或は之に相当する部を示す。伊勢の如き短章の寄せ集めは、短章の段を甲部とし、比較的長い段、即ち多少物語的内容を持つと思はれる段々を選んで乙部とした。此の調査はそれ程テキストを選ぶ必要はないと思つたので、有朋堂文庫によつた。以下各物語につき特にテキストを挙げぬものは有朋堂文庫によつたものと承知せられたい。

竹取	甲	発端ヨリ 百句ヨリ	六二行	乙	車持皇子ノ 段百句ヲ 東下リ其 他長イ段	六七行 八三行
伊勢	甲	初段ヨリ 順ニ	六三行	乙		

右の結果を見ると甲の場合では、両者の句長は相匹敵してゐる。而して乙の場合に於ては、竹取の句長は六七の値で、同書甲の場合の六二と大した変化を示してゐない。然るに伊勢の方の乙の場合には八三で、甲の六三に対して著しく句長を増加してゐる。此の現象は如

何に解釈せらるべきであるか。

竹取の乙の場合は、車持皇子の蓬萊行の偽物語を中心とする段で、作者の興味が相当高潮してゐると考へられる箇所である。伊勢の方は、第九段の東下りの条（此段は甲の場合と重出）、第二十三段筒井簡の条、第六十五段「恋せじとみたらし川に」の歌を含む長い段、六十九段狩の使の条（こゝまでで九十五句）、それに七十八段の一部であつて、作者の筆が、比較的物語的意識で走らされてゐると考へられる段を選択したのである。茲に此の統計に対する私の解釈を端的に述べる。

竹取に於て甲乙兩者の句長の差の小さい事は、解説文と叙事文との文体が、客観的には多大の差異を示して居らぬ事を語るものである。抑く竹取や伊勢物語に於ける解説的部分を見るに、実用文に比して多少の洗煉はありとするも、尚常識的理知的態度で書かれて居り、恐らくは當時の実用的国文の文体と相去る遠からぬものであらうと考へられる。然るに、物語中の中心を成す叙事の部分に、必ずや作者の文芸的意識が高潮して来つて、其の表現も自然実用文のそれとは異なるものになければならない。竹取物語に於ても、発端と中心部とは、おのづから作家の表現態度の異なるものがある事は感ぜられるのであるが——たとへば発端の部分では、助動詞「けり」を用ゐた過去の表現が多いのに、中心部では、現在又は現在完了の表現を多く用ゐてある如き——、その表現態度の差異は、句の長さといふ点には著しく現はれて来ない。句長といふ事が、かゝる表現態度に、本来無関係であるべきものならば、右の統計に現はれた現象は勿論表現態度の問題に何の示唆をも与へぬものであらうが、一方伊勢の方は、甲乙の場合にあれだけの差を示せる事を思ひ、又次に挙げる大和物語以下の諸作品に見られる二つの場合の句長の差異をも

考量し、且之を吾々の文章表現の態度に内省して見るならば、句長の問題が表現態度と必然の關係にあるべきは争ひ難い。而も竹取に於ける句長の現象が、異なる二つの表現態度に対して、著しい差異を呈して居らぬ事実は、作者の主観に於てはともあれ、その客観的表現様式としては、解説的実用的の表現と、文芸的表現とが、十分に分科発達して居らなかつたといふ文章発達史上の一事実を示唆するものではあるまいか。かく考へて、伊勢の句長統計を見れば、既に解説文と叙事文との間に相当著しい表現様式の変化が推定される。即ち竹取伊勢兩者の此の統計を対照する事によつて次の如く考へられる。竹取の時代は、口づから語られる物語、即ち語り手の息つぎと、聴き手の聴覚に頼る端的理解の要求から制限且平均せられる句格が、そのまゝ記載されたものといふやうな文体であるのに対し、伊勢は、解説的部分では、実用的口語表現と多く離れぬ表現を用ゐて居るが、文芸的叙事的方面では、相当流暢な美的表現を用ゐるやうになつて来たと見るべきであらう。是に於て、此の句長といふ一の着眼点からすれば、竹取の文章は、伊勢のより古いと考へるのが至当である。

次に参考として、同様の調査を左の四つの物語に及ぼして見た。

(甲部)

大和	初段ヨリ 順二句	八三行
空穂	俊隆	八五〇
落窪	卷一初	六七〇
源氏	桐壺	一二七〇

(乙部)

大和	初段ヨリ 順二句	八三行
空穂	俊隆	八五〇
落窪	卷一初	六七〇
源氏	桐壺	一二七〇

此の統計を見ると、竹取伊勢の場合と恰も正反対の現象が現はれてゐる。即ち彼に於ては、甲の場合の句長の値は、乙のそれより小であつたのに、此の場合は、反対に甲の方が句長が大になつてゐる。

これはたしかに物語文体的転向した事を語るもので、一言にしていへば、従来の叙述の態度から一步進んで、描写殊に平面的描写が、此の時代に盛んになったのに因ると思ふ。即ち一方、解説的叙述の部分に、文体的流麗な文体が用ゐられて句が長くなると共に、物語の中心部に於ては、或る一場面を組み立てゝ居る事柄を、丹念に一つ一つ報告するといふリヤリスチックな描写が發達して来た。これは絵巻物の絵詞の影響ではあるまいかと思はれるのであるが、之に加ふるに、登場人物の對話なども、短い語句で、矢継早に応酬するといふやうに、著しく写实的になつて来てゐる。これが為作者の油の乗つた部分に於て、却つて句が短くなる傾向があるのだらう。中に就き落窪は、甲乙の場合に於ける句長の差が甚だ少いのであるが、これは、落窪には純粹の解説的の部分は甚だ少く、発端の部分から作者が描写的態度を取つて居り、実は甲乙の二つの場合を区分し難い有様であるからだらうと思ふ。然しそれにしても、甲の場合に於て、空穂八五に対して、落窪は六七で、二〇に近い差を見るといふのは、落窪の文の簡潔な事を証するものであり、此の点からのみいへば、落窪の文は空穂よりも古体といへるかも知れぬ。源氏に至つては句の長さは異常な増加を來して居るが、それでも、對話のまぎつた若紫の一部を取ると、叙述の部分よりずつと句長を減ずる。これは詞が或程度まで写实的で、句が短いのに因る。草子地の文に於て、句が長くなつたのについては、従来の作には僅にしか見られなかつた心理描写が、源氏に至つて精緻を極むるに至つたのも其の因と考へられる。狭衣物語については反覆精確に調べたのではないが、其の巻頭から順次句数を数へて見るに、五十句で九十行を占め、百句ならば百八十行を占むべき割合である。叙述描写の精細はさる事ながら、既に冗漫の弊に陥つたものと謂はねばならぬ。

以上の如く、平安朝の散文学の文章は、源氏に至るまでに大略三遷してゐると考へてよからう。即ち第一期は、口誦文芸的様式を全く脱却するに至らなかつた素朴時代で、解説的叙述と写实的描写とがまだ十分に分科して居らぬ。竹取物語の文章は大体此の段階に属するものとしてよからう。第二期は、叙述と描写とが分科し、叙述の部分は、解説的態度から一步進んで、更に事件全体を包む情調を表現する傾向を持ち來り、描写部は忠実な平面描写となつて来る。伊勢物語は、歌物語としての性質上、描写と称すべきものは見られないが、叙述に情調意識が加はつて居る点、第一期から第二期への過渡的作品らしき俤がある。落窪・空穂は正に此の第二期に属する作品であらう。第三期は源氏によつて代表せられる心理描写、情調表現に重点を置いた優婉精緻なる表現様式の高潮に達した時代である。私は以上の文章發達段階の想定の上に立つて、竹取に、現存物語中の最古の位置を与へんとするものである。

二、本物語中の「なむ」「ぞ」「こそ」の三強辞について

平安朝全史の伊勢物語の文章を論じた条に、助詞殊に強調助詞の使用に関し「なん最も多く、ぞもこそあれど、土佐日記の多きに比すべくもあらず」(一八六)とある。私は、此の強調助詞につき、竹取と伊勢、又土佐日記その他の平安朝散文を取つて、精確な検討を行つて見たならば、其の結果竹取の時代的地位を確める資料が得られはしまいかと考へてこれを試みたのであるが、然し其の結果は前項の句長の調査よりも一層不十分なものであつた。何となれば、「ぞ」「なん」「こそ」三強辞の意義性質、及び用途には、それぐ微妙の差異があり、従つて、これら各辞の分布状態を以つて、作物の時代性の判定に資する事は甚だ困難であるからである。但し、私の試みた結果から、一二例外と見做し得らるゝ数字を取除く事が許

容せられるならば、次の事だけは謂ひ得られると思ふ。

強調助詞の使用は、時代を下るに従つて漸次増大する。而して竹取は、現存平安朝散文作品中（但し空穂物語を除く）、強調助詞総数最も少きものであり、従つて最古の作品らしく考へられる。

今次に諸作品に於ける三種の強調助詞の分布を表示する。

書名	三強辭總計			内		
				なむ	ぞ	訳
竹取	六四	67	34		12	18
伊勢	八二	7	12			8
土佐	一二二	88	4			13
空穂	三三	3	13			6
大和	一五〇	17	6			42
落窪	八六	18	12			20
蜻蛉	一二六	62	20			44

◇右の統計には、竹取は武田博士の校註本、伊勢は古典保存会複製の時頼本、土佐は拙著広文堂出版の本を用ゐ、他は概ね有朋堂文庫本によつた。

◇此の統計は伊勢物語全巻の散文の分量（一行三十九字詰四百四十四行）を規準とし、各書之に相当する分量に対して試みたのである。各書共和歌は除外した。土佐は分量が足らぬので、二百七行分から得た数を二倍した。

此の統計からは、強辭の総計について（空穂の強辭使用の少い事は特例として除外する）、前述のやうな事が考へられるだけで、各助詞それ／＼の使用数や、又各助詞相互の比率などからは、予期した程の資料を発見し得なかつたのは遺憾である。然し此の作業によつ

て三助詞の意義性質用途について、大體の概念を確め得た事は、私にとつてはよき所得であつた。今竹取・伊勢又は土佐などの比較について一二の試按を附加するに方り、その準備として、此の三辭について得た概念を、簡単に左に表示する。

強度	意義	語感	用途	時代性
なむ	ヤゝ強	客観的 解說的 明快的	* 散文ニ ノミニ ニ 詞・地共	最モ古シ
ぞ	カナリ強	主観的 強制的 強力的	散文類 文共ニ 主トシテ	次ニ古シ
こそ	最モ強	同 右 反説的 * 婉曲	主トシ テ類文 主トシテ	新シ

◇此の三辭の語感、これらが文の終に附いて希望を表はす時、よくわかるやうに思ふ。例へば、「早く行け」といふ意を「早も行かなむ」、「早く行かむものぞ」、「早く行きこそ」として見るとよろしい。「行かなむ」の「なむ」が、強辭「なむ」の一用法である事は、山田博士の説に拠る（日本文法論六五七参照）。

◇「こそ」を反説的とは、「色こそ見えね」「ガ、シカシ」香やはかくるゝ」の類の用例多きについて言つたのである。

◇「こそ」は反説的に用ゐられる事が多い為か、曲折的、情趣的の感じがあらやうに思ふ。

◇三助詞の時代性を一概に定めるのはやゝ危険に思はれるが、少くとも散文助詞としては、「なむ」は、「なも」の古形に於て最古く、今、現代の口語は勿論文語（普通文）にも全く用ゐられぬ。「ぞ」は現今では係助詞の性質を失ひ、感動詞として用ゐられ、「こそ」は現代口語では、その結法は失はれたが「それこそ本物だ」などと依然強調助詞として用ゐられてゐる。這般の消息は此の三助詞の時代性を暗示するものである。

さて以上の如き三助詞に対する私の認識を以て、前掲三助詞の分布表を見ると、多くの疑問が起るが、その内竹取伊勢土佐三者に關聯して二三の点を取出して一言を添へておく。

先づ竹取伊勢両者夫々に於ける三助詞の分布の状態を見るに、「なむ」最も多く、「こそ」之に次ぎ、「ぞ」は最も少いといふ成績に於て相一致し、此の点からは、両者の略々同時代性を窺ふに足るやに考へられる。土佐日記に於ては、此の三助詞の相互關係が前兩書と全く趣を異にし既に助詞使用意識に於て、劃期的差異を生じて居るのではないかと思はれる。此の事実を参考すれば、竹取伊勢兩書に於ける使用助詞の並行状態にある事實は、両者の製作年代の接近を思はせるに足ると考へる。が然し、兩書に於ける各辞多少の比率を見ると、竹取では「なむ」の使用率は、各強辭總数の五三パーセントなるに對し、伊勢は、其の強辭總数の八二パーセントで、「なむ」の使用率に於て伊勢の方が遙に高率を示してゐる。そこで「なむ」が三助詞中時代性が最も古いといふ認識を之に適用すると、「なむ」の使用率の高い伊勢は、竹取に比して、其の文体に古色があるといふ結論が抽出出来さうである。ところが、列挙した他の物語日記中、「なむ」の使用の高率なものを求めると、大和物語がある。これは三助詞の使用總數一五〇に對し、「なむ」一三二、即ち八八パーセントを占め、伊勢より更に高率を示してゐる。大和物語が伊勢よりずっと新しいものである事は、其の記事内容によつて明かであるが、而も「なむ」がかく高率なる事は、此の書が、伊勢の文体の極端なる模倣者である事、及び、和歌の詞書の如き記載の性質から將來される必然の成績であると考えふべきであらう。して見ると、伊勢に於ても「なむ」の高率なる現象は、その作品の性質が最大の原因と解すべく、これによつて、竹取より古いとは斷じ難い。即ち若し伊勢の著者をして竹取物語を書かしめると仮定すれば、其の結果は現存の竹取と同様の強辭分布の状態を呈するに至るやも測られな

りは、その作品の性質の顯現と見らるべきものの如くである。

次に、注意を惹かれるのは、竹取に於て「こそ」の高率なる事である。伊勢では「こそ」が、該書中の三助詞總數の一〇パーセントの比であるのに、竹取では、二八パーセントに相當する。「こそ」を、比較的新時代の強辭とするならば、此の点でも前同様竹取の文が伊勢に比して新時代色を持つてゐると謂ひ得る筈であるが、これもさう簡單には結論出来ぬ。蓋し「こそ」は深刻な表情力を持つた強辭で、一種すねたやうな婉曲味を持つてゐる為か、對話若しくは消息文に多く用ゐられてゐる。「こそ」が、現代對話語として生存を保つてゐるのも、一は此の性質に因るのかも知れぬ。實際竹取に於て、「こそ」は詞の内にのみ使用され、地の文中には一も用ゐられてゐない。伊勢に於ける「こそ」の用例實數は八（三助詞總數の一〇パーセント）であるが、詞に用ゐたのは二例、詞に準ずべき心中に思つたことの叙述に三例、地の文に用ゐたのが三例である。伊勢はその書の性質上、詞は極めて少いのであるが、而も詞（又は文詞）の内に「こそ」使用數の四分の一の例が見られ、又詞に準ずべき挿入句中の三例を加へると、六割以上は、詞又は詞に準ずべきものに用ゐられて居るのである。これによつても「こそ」が對話に頻用せらるべき表情的の語なる事が知られるのであつて、もし伊勢が竹取と同様の對話を含むと仮定すれば、恐らく「こそ」の使用數は竹取より更に多くなり、一方「なむ」の使用數は減じ、「なむ」と「こそ」の比は竹取に接近したものになるであらうと思はれる。それ故に竹取に於ける「こそ」の使用の高率は、これ亦その作品の性質によるもので、その時代性を定むる資料とはなりかねる。但し、竹取では「こそ」の使用が、詞のうちに於てのみ見られ、地の文には絶対に無いのに、伊勢では、「こそ」の用例の四割が地の文中に在るといふ

事は注意に値する。この現象は、竹取は地の文の分量が伊勢より少いといふ事に起因するのかも知れぬが、恐らくは、「こそ」の対話用の表情語であるといふ古い語感が、竹取の方では純粹に保たれ、伊勢では、既にそれが地の文にも流用せられるに至つたが為であらう。さうでないとしても、「こそ」が地の文にまで分布せる事は、少くとも伊勢の叙述の文が、竹取のそれに比し表情的な婉曲表現を多用する傾向に在るを示すもので、此の点からは、竹取の叙述文が、伊勢のよりも素朴であると思ふ。

× × × × ×

此の章で述べた所をまとめていふと、「なむ」「ぞ」「こそ」三強辭の使用といふ点に着眼して、竹取伊勢兩者を比較すると、たしかな事はいへないが、竹取の方が、三強辭の使用総数に於いて少い事、又「こそ」が詞の内にも用ゐられてゐるといふ点に於て、伊勢よりは文章として古色あるものとすべきであらう、といふに帰する。

三、本物語の和歌の段落法について

第三に、竹取物語中の和歌について觀察して見よう。但し今度は前二項の如く、伊勢物語とは比較しない。伊勢の歌は、多く古歌であつて、伊勢の著者自身の創作ばかりではないのであるから、これと比較して、両書の新古を云々する事は出来ぬからである。よつて、此の章では伊勢との比較から離れ、古今集後撰集あたりと比較する事になるであらう。而して其の觀察点は、専ら短歌の段落法の上に限る事とする。

武田博士は、竹取の歌は古風ではあるが、奈良朝のものとは云ひ難く、平安朝末期の人々に嫌はれた所謂したたかの語を以つて評すべき歌であると言つて居られる（校註竹取物語 附載一〇五）。同博士は、現存竹取物語以前に其の原典たる漢文若しくは漢字で書かれた竹取翁の譚があ

つたらうといふ仮設から総てを論じて居られるので、従つて竹取物語中の歌は、必ずしも現存の仮名書き竹取物語成立当時のものでなく、「これらの歌は、幾分の時代化は免れないにして、因つて来る所は、かなり古いものがあらう」（同前）と考へて居られるが、私は此の如き仮設を想定せず、竹取中の和歌は、やはり此の物語の作者が詠出したものと解し、従つてその歌の風格を考察して、此の物語の時代性の想定に資せんとする次第である。

竹取は短篇であるが、歌も僅に十五首を含むに過ぎず、これに或る統計的取扱をしても、其の結果は頗るたより無いのであるが、尚為さざるにまざると考へて、之を敢てする。

和歌の段落法の觀察は人によつて区々であるが、私は一首の歌は、口誦上と、文法上とに於て略相一致すべき一つの段落点があり、之によつて二つの大段落に分れると考へてゐる。で、大体に於て第一句の終は、口誦上、一首が二分さるべき段落点とは成り難いから、よしや文法上そこに或る切目が感ぜられるとしても、それが断然たる終止形式で無い限り段落点と認めぬ事にする。第四句の終に文法上の段落点認められる場合も、第一句末の場合に準すべきであるが、奈良朝又はその以前の短歌には、長歌の歌格を踏襲し、従つて第四句末に段落点を有する歌（例、万二、玉葛みならぬ木にはちはやぶる神ぞつくとふ、ならぬ木ごと）に）が相当にあるから、平安中期までの歌にも、古体の残存してゐるものとして之を認める。即ち竹取の短歌の句切を、二句切、三句切、四句切の三つの範疇にあてはめて觀察し、これを古今集若しくは後撰集あたりの短歌と比較して見ようといふのである。左に竹取の歌十五首を、私の句切法で分類揭示して見る。

二句切 四首

いたづらに身はなしつとも（以上副修句）、玉の枝を手折らでさらに帰らざらまし。

わが袂けふかわければ（合文伴句）、わびしさの千種もぐさの数も忘れぬべし。

まことかときて見つれば（合文伴句）、言の葉を飾れる玉の枝にぞありける。

かひはかくありけるものを（合文伴句）、わびはてて死ぬる命をすくひやはせぬ。

三句切 十一首

海山の道に心をつくしはて（重文上句）、ないしの鉢わのなみだ流れき。

おく露の光をだにも宿さまし（第一文）、小倉山にて何もとめけむ。（コレハ純粹三句切トモ謂フベキ格）

しら山にあへば光のうするかと（副修句）、はちをすててもたのまるゝかな。

限りなきおもひに焼けぬかは衣（客語或ハ独立連語）、袂かわきて今日こそは著め。

但シ此歌ヲ、限りなきおもひに焼けぬかは衣「ノ」袂かわきて、今日こそは著め。ト解スレバ四句切トナルガ、口誦上ノ句切ヲ参考スレバ三句切トスルガ妥当デアラウ。

なごりなくもゆと知りせば、かは衣、おもひのほかにおきて見ましを。

此ノ歌ハ、第三句ノ「かは衣」トイフ名詞ガ、上句ニ対シテハ主語ノ倒置セラレタモノト見ルベク、下句ニ対シテハ客語ノ地位ニ立ツモノノデ、技巧的ノ変格デアル。此ノ種ノ歌ハ、口誦上カラハ、第三句ガ第二句ニ引続ケテヨマレタモノト想

像スベキ理由ガアリ且、文章成分トシテモ、ナカバ上句ニ属スルモノト解スベキデアルカラ、コレヲ三句切中ニ編入スル。年をへて波立ち寄らぬ住の江の（序）、まつかひなしと聞くはまことか。

かへるさのみゆき物うくおもほえて（倒置セラレシ述部）、そむきてとまるかくや姫ゆゑ。（此歌四句切トスベキ説アリ。ソレニツキテハ後ニ云）

葎はふ下にも年はへぬる身の（主語）、何かは玉のうてなをも見む。

今はとて天の羽衣きる折ぞ（副修句）、君をあはれと思ひいでぬる。

あふこともなみだに浮ぶわが身には（副修語）、死なぬ薬も何にかはせむ。

此の外

呉竹のよゝのたけとる野山にも（副修語）、さやはわびしきふしをのみ見し。

の第二句は、田中大秀の「解」に用ゐた上田百樹の校本に拠つたのであるが、類従本、小山儀の「抄」、流布板本（茨城多左衛門板）、武田博士本、皆「よゝのたけとり」とある。これならば「たけとり」は名詞で、二句以上を主語と見るべく、従つて二句切となる。「たけとり」の方がかく多いのであるが、歌としては、「たけとる」の方がよささうであるし、且は万葉以後は、概して三句切歌格優勢時代であるから、姑く三句切に数へておくことにする。

結局十五首の内、二句切四首、三句切十一首といふ結果で、これを百分比に換算すると、

二句切

二七%

三句切

七三%

となる。これを古今・後撰あたりと比較して見ようとするのであるが、その前に、記紀以後平安朝末までの短歌段落法の趨勢を知る為に、記紀・万葉及び八代集の段落統計を掲げて見る。

	二句切	三句切	四句切	其他
記紀	四〇	三〇	二九	一
万葉	三三	四六	一九	二
古今	二八	六七	五	〇
後撰	二五	七一	四	〇
*拾遺	四〇	五七	三	〇
後拾遺	二四	七〇	三	三
金葉・詞花	二二	七三	四	一
千載	一七	七七	四	二
新古今	一五	七〇	四	*一一

*拾遺集の二句切多く、三句切少きは異例である。上代歌人の詠多く入れる為か。それとも私の統計に何等か錯誤があつたのか。とにかくこれは例外としておく。

*新古今に於て二、三、四句切以外の格多きは、初句切(例「花ぞ見る道の芝草ふみわけて、よし野の宮の春の曙」が俄然多くなつたのによる。これらも口誦上初句段落を否認すれば、多くは三句段落となる事、括弧内の例の如くである。

以上の統計表によれば、時代の下るに従ひ、二句切は漸減し、三句切は通増する傾向なる事がわかる。而して竹取の歌と古今・後撰の間に於て、此の傾向は如何に顕はれて居るか。今、便宜両者の段落統計を左に摘記する。

竹	二句切(古格)	三句切(新格)	四句切(最古格)
取	二七	七三	〇

古 今 二八 六七 五
後 撰 二五 七一 四

但し竹取の歌は前述の通り実数十五首について見た結果を百分比に換算したもので、その成績は甚だ不確実なるを免れない。即ち古今では四句切が百首中五首、後撰では、同じく四首ある割合であるが、もし竹取の方にも同じ割合で四句切の歌があるとしても、十五首の実数中には一首を形成して表はれ得ないわけである。そこで、竹取の歌の実数は十五首であるが、仮にこれを百首あるものとし、その内古今同様五首の四句切歌を含むと仮想して、右竹取の段落表の中、二句切及び三句切の数から、按分で之を減じた結果と、古今・後撰のそれと並記して見ると、

竹 二句切(古格) 三句切(新格) 四句切(最古格)
取 二五 七〇 五
古 今 二八 六七 五
後 撰 二五 七一 四

といふ結果になる。即ち、古今集の歌と大体に於て、歌格上相似た数字となるのであるが、厳密にいへば、古今集よりは二句切が少く、三句切が多い。二句切は古格であり、三句切は新格であるから、換言すれば、竹取の歌は古今より古格が少く、新格が多いといふ事になり、結局、古今よりは新体であるといふ事になる。更に竹取の成績を後撰と対比すると、これは亦、こしらへたやうに殆んどピッタリ出合ふのである。竹取の歌の中に四句切五首(百首に)を仮設したが、もしその仮設を後撰と同数の四首とすれば、竹取後撰の数字は全く一致する事になる。たゞ何分にも竹取の歌数が少い為、此の数字をそのまゝに信頼する事は出来ないが、大体以上は妥当な結果と考へられる。若し、かの「呉竹のよゝのたけとる」の歌を、諸本の

多きに從つて「たけとり」と名詞に読めば、二句切、三句切に於て、迭に一首の増減が生じ、

二句切(古格)……三一 三句切(新格)……六四 四句切(最古格)……五の比率に転化する。此の結果からすれば、古今よりも、稍古体といふ結論を得られる。

尚爰に重大な疑義の存する歌がある。それは先に三句切と数へたものの内、

かへるさの行幸ものうくおもはえてそむきてとまるかぐや姫ゆゑ

の一首である。武田博士の校本の頭註に、此の歌の第四句「そむきてとまる」は「かぐや姫」に係る連体形でなくて、終止形である。

即ち結局は冒頭に旋らしてかぐや姫ユニ、行幸ノ帰路ガモノウク思ハレ、足モ進マズ、振リムキ振リムキ立止ルコトデアルと解するのが妥当であると言つて居られる。これは有力な新説である。なるほど、「おもはえて」といふやうな中止形で止めて、下に倒置句が来る如き歌格は、恐らく平安朝中期以前には多くあるまいと思はれる。然し意義の上から言ふと、「そむきてとまる」を博士のやうに解するのは如何にも無理で、やはり旧説通り、姫が帝との同行を肯ぜずして翁の家に止るの意に解すべきものと思はれる。とにかくに決し難いが、今仮に博士の説に從ふと四句切の段落とすべきで、この分類によると、二句切四首、三句切十首、四句切一首となる。(之を今甲とす)亦若し、「具竹のよの竹とり」の歌を二句切とする分類中に、此の四句切を算入すると、二句切五首、三句切九首、四句切一首となる。(之を今乙とす)此各々の場合を百分比にした結果を、古今及び万葉と並記して見る。

二句切(古格) 三句切(新格) 四句切(最古格)

古	今	竹	取	甲	乙	万	葉
二八	二六強	三三	三三	三三	三三	三三	三三
六七	六七弱	六〇	六〇	六〇	六〇	六〇	六〇
五	七弱	七	七	七	七	七	七

竹取甲の結果は古今と殆んど同じく、乙の結果は古今よりは古く、万葉よりは大分新しい。(三句切多く、四句切少し。)といふ事になる。

この如く、本物語に於ける短歌の段落法の判断は、動搖を免れないが、以上幾つかの場合の判断を列記して見ると左の如くである。

- (1) 後撰集と殆んど同じである。
- (2) 古今集よりや、古体である。
- (3) 古今集と殆んど同じである。
- (4) 古今集よりは古く、万葉集よりも大分新しい。

即ち此の結果から言ふと、竹取の歌は如何に新しくても、後撰集の歌格よりは下らないといふことになる。而して後撰の段落統計の結果は、時代を以ていへば、延喜以前の歌格を指示すると言ひ得る。何となれば、私が先に挙げた八代集の段落統計は、各集四季の部の巻頭から逐次百首をとつて試みたものであつて、後撰の巻頭百首中には、天曆時代の歌人は極めて少数で、六歌仙時代から延喜時代までの歌人が大多数を占め、尚その以前のものと思はれる説人不知の詠も多く、これから統計された結果は、当然延喜以前の歌格を指示するものでなければならぬからである。されば竹取物語は、その歌の段落法から見ても、延喜以前の著と考ふべきで、宣長翁が此の物語について、「いたくふるき物とも見えず。延喜などよりはこなたの物とぞ見えたる」(玉の小櫛巻一)と言つたのは、直感的鑑賞からの独断に過ぎぬといふべきである。

尚竹取中の左の歌について一言しておきたい。

なごりなくもゆと知りせば、かは衣(上ニハ主語、下ニハ客語)、

おもひのほかにおきて見ましを

前に註記した如く、第三句に五音の体言を置き、それが上部、下部夫々に対して、異なつた文章成分の役目をするといふ構造は、記紀短歌には全く見えず、万葉にも例が極めて少い。万葉巻十七以下、即ち奈良朝中期以後の歌のうちにも

吾のみしきげさぶしも、ほとゝぎす(上ニハ客語、下ニハ主

語)、丹生の山辺にゆき鳴かなも(巻十九

見むといはゞ否といはめや、梅の花(上ニハ客語、下ニハ主語)、

散り過ぐるまで君が来まさぬ(巻二十)

位に過ぎぬ。これらの例も、果して意識的にかく布置せられたかどうかは疑はしいが、これが古今集になると、巻頭から百首のうちに十五首を算する事が出来る。かう此の構造が頻用せられる所を見れば、たしかに古今時代には、意識された技巧的構造である事疑ない。但し此の格は五音の体言を主題語とする場合に限られ、「梅の花」「桜花」「時鳥」等、四季の題詠的な歌に多く、雑歌に少い。竹取の歌、それは性質上雑歌と見るべきものが多いのであるが、その十五首中に、此の構造の歌一首を見る事は、竹取の歌の古今時代へ近接せるものなるを思はせる。武田博士は、此の物語の歌を、奈良朝に引づく平安初期時代ぐらゐに古く見ようとしてゐられるやうであるが、さまでは古くあるまい。現存竹取物語が書かれた時に、歌も亦著者によつて作られたと見て、歌の時代色と、文章のそれとの間に些か矛盾する所はないと信ずる。

て、竹取物語は伊勢物語よりも古く、延喜以前のものである事は略確実だと言ふ結果になる。

第二 素材を観点としての本質検討

一、本物語と羽衣説話

これより竹取物語の、物語としての本質につき検討を試みる。その方法として、此の物語を構成してゐる素材を考察し、それが如何に取扱はれてゐるかを検討しつゝ、此の物語の本質を掴みたいと思ふ。

私の考ふる所では、此の物語の素材として、主要な二つの源流がある。一は羽衣伝説であり、一は長者伝説である。此の二つにつき、段階をつけるならば、前者は正素材であり、後者は副素材である。尚此の外にも、外来の神仙説話の景物を撰取してゐるかの如くにも見られる節がないではない。然しそれは、元来羽衣説話が外来のものであり、その説話に内在するエキゾチズムが、時代に応じた展開を示したものと見られるので、特に神仙説話を副素材とまで考へる必要はあるまい。従来、竹取物語は神仙譚の翻案であるといふのが略定説になつてゐるやうであるが、此の説は、断然清算されなければならぬものと、私は信じてゐる。

× × ×

竹取物語と羽衣説話との關係を説明するには、まづ羽衣説話の概説から始めるのが便宜であらう。

羽衣説話は、神婚説話の一種として世界的に分布してゐる白鳥処女説話の別名と考へてよからう。意味に広狭の差はあるが、こゝには同義語としておいて差支ない。さて白鳥処女説話の標準的な形は左の如くである。

以上三項の検討の結果をまとめて見ると、国語学的見地からし

一、白鳥が羽衣を取つて天女になり、沐浴する。

二、人間の男性、主として獵師或は漁夫が羽衣を盗み匿して、天女に結婚を迫る。

三、結婚後若干の子女を挙げる。

四、産児の後、夫婦間に破綻を生じて、天女は昇天する。(西村

真次氏の神話学概論三六九—三七〇に拠る)

これは西村氏が東西兩半球に互つて分布せる白鳥処女説話の四十三例から歸納した結果の記述であるが、我が国に分布する同説話だけから言ふと、天女と人間の結婚、産児といふ重要な部分が變形されてゐるものが数に於て寧ろ多い。結婚産児の條件を備へてゐるのは僅に近江国風土記に見える伊香小江伝説(古典全集、採擷、諸國風土記八七、以下同じ)ぐらゐのものであらう。又、我が国の白鳥処女説話、即ち羽衣説話では、白鳥といふ事が明言されて居らぬのを常とする。前記伊香小江伝説の外には常陸風土記香島郡白鳥里に見えてゐる白鳥説話(白鳥処女説話の略、以下同じ)の断片らしいものに、「有_レ白鳥。自_レ天飛來。化為_二童女_一。夕上朝下。：昇_レ天不_レ復降來_二」(群書類從十七、卷一、一二二)とあるぐらゐなものと思ふ。されば我が国の羽衣説話から、其の必須の條件を抽出すると、前記の四ヶ条は、次の如くその意義を押括められなければならない。

一、或人間(男)が地上に降りてゐる天女(神女若しくは仙女ではない)を見出す。

二、其人間は、天女が或事情の爲天へ還れぬのを幸、何か要求を提出する。

三、天女は人間の要求に應ずる。さうしてその結果人間は幸福になる。

四、天女は天へ還れなかつた事情が消滅し、昇天する。其の結果一時幸福であつた人間の生活は大なる瘡痍を受ける。

羽衣説話の特質をかく押括めた上で、竹取物語をとつてこれに比

べると、殆んど総ての條件に適合してゐる。のみならず、竹取は此の以外にも厳格な意味の白鳥処女説話たる要件を具へてゐる。即ち、翁がかぐや姫を養ふのに、「いと幼ければ籠にいて養ふ」とあるのは、かぐや姫なる天女の本原が、鳥類であるといふ原話の佛の無意識裡に漏れ出たものであらう。海道記に見えるかぐや姫伝説(群書類從十七、卷一、九七八)では、竹林中であつた鶯の卵から姫が生れた事に語られてゐる。西村教授は、白鳥説話の分布地が、湖沼の無い平野地方である場合には、その天女の本原が、鶴或は鳩として語り替へられてゐる事(白鳥の場合七に對し、鶴鳩の場合六を注意してゐられる。之によつて考へれば、竹取の翁の話に撰取された白鳥説話に於て、天女の本原が鶯に語りかへられる事は最も自然な道行である。尚一つ、姫の昇天の際、飛ぶ車に乗るとあるに拘らず、天の羽衣を着る事が、重要な昇天準備として特筆されて居る事は、かぐや姫の原型の前身が鳥類たる事を語るものである。いふまでもなく総ての羽衣説話に於ける天女の羽衣は、鳥の翅の美化象徵されたものであつて、かの後世の犬天狗が、その本具の神通力によつて飛行自在なものとされるに至つても、猶羽団扇を持つて居り、それが天狗の原型の寫であつた時代に於ける形象の遺伝であるのと、全く同様の關係に在る。)

さて竹取物語の構成が、羽衣説話から由來したものであらうといふ大体の目標を得て、我が国に行はれた此の種の説話中、どれと最も類似してゐるかについて物色するならば、かの丹後風土記の逸文として伝へられる奈具社伝説には、たと行き當る。此の伝説は、類聚神祇本源卷十一や、珊瑚璣集下(同書共統々群書類從第一所収)に出て居り、又坂土仏なる人の太神宮參詣記(群書類從卷二十七)にも抄訳してある話で、栗田博士の古風土記逸文、丹後の部に輯載されてゐる。今次に、その梗概を語り

つゝ、竹取物語との異同を注意して行かう。

丹後国丹波郡比治の里に、和奈佐老夫、和奈佐老婦といふ老夫婦がすんでゐた。或時附近の比治の山に行つて見ると、其の山頂の麻奈井といふ沼に、八人の天女が降つて水浴をしてゐる。老夫は竊に一人の天女の衣裳を取り隠した。人有りと知つた天女等は各々衣裳を取り着て天に飛上つたが、衣裳を匿された女娘一人は、飛行のすべてを失つて水中に身を隠して愧ぢて居た。老夫は此の天女と話し合つた末、遂に之を養女とする事になり、家に伴ひ歸つた。

これが奈具社伝説の発端の部分であるが、右の梗概文に圈点を附しておいたのは、特に注意すべき語として、原文の文字を其の儘用ゐた事を示す。そこで圈点の箇所について一寸読者の注意を促しておきたい。「天女」は天女であつて仙女や神女と必ずしも同義語でない。これを懷風藻や万葉集に見える「仙」或は「仙媛」などと同様に神仙的概念を表はすものとするのは早計である。古事記に「天なるやおと棚機」といひ、神楽歌に「天にます豊岡姫」といふも、概括的に漢字に表はせば天女であつて、これらまで、奈良朝のやゝ前に漢土から輸入された神仙思想からの産物とはいはれない。次に「衣裳」は羽衣と断つてないが、これを着た他の天女は天に飛上つたとあるから、衣裳は即ち飛行に必要なものであり、羽衣であり、鳥の翅の説話化されたものに相違ない。是に於て沼に沐浴する八人の天女の前身は鳥類殊に水鳥に相違ないといふ事になり、奈具社伝説は其の発端に於て白鳥処女説話たる形を持つてゐると謂ひ得るのである。

以上の発端に対し、竹取の発端を対比して見る。

今は昔、竹取の翁といふ者ありけり。野山にまじりて竹を取り

つゝよろづの事につかひけり。名をば讀岐造麻呂となむいひける。その竹の中に、本光る竹なむ一筋ありける。あやしがりて寄りて見るに、筒の中光りたり。それを見れば、三寸ばかりなる人いと美しうて居たり。翁いふやう、「われあしたごとゆふべごとに見る竹の中におはするにて知りぬ。子になり給ふべき人なんめり」とて、手にうち入れて家へ持ちて来ぬ。妻の姫にあづけて養はす。美しきこと限なし。いと幼ければ籠に入れて養ふ。(武田博士校註本。以下同)

此の発端部は、直接羽衣説話の原型に比べると、多くの類似があるとはいへないが、まづ奈具社伝説と比較して見れば、その間の類似は決して偶然の一致とは言ひ難く、同源の説話の分岐変形したものであるを思はせるに十分であらう。こゝに於てか、此の物語の素材として、羽衣説話が摂取されてゐる事を首肯し得る。で、両者の発端相互について又は白鳥説話の原型との異同について換するのであるが、類似点の今更贅するまでもない所は省略して、主としてその相異点の必要な箇所だけを指摘するに止める。

奈具社の話、又多くの白鳥説話では、地に留る天女は、八人の内の不運なる一人が、人間の欺瞞によつて己むを得ずさういふ事になるのであるが、竹取の話では、卒然として一人の天女が、恰も彼女自身の意思であるかの如く、翁の切り取るべき竹の中に降り来り、翁の手中に帰するといふ運びである。尤も、何故に此の天女かぐや姫が下界に降らなければならなかつたかについては、物語の末の方に、「おのが身はこの国の人にもあらず、月の都の人なり。それをなむ昔の契ありけるにより、なむ、この世界にはまうで来りける」と彼女自身の口から説明し、又、姫を迎へに来た天人の口を藉りて、「いさゝかななる功德を翁につくりけるによりて、汝が助けにとて片時の程